

# 『彼女の肖像』

どうしてこんな事になったのだろう。

誰かが呟いた。

いや、本当は誰も口に出してなどいない。誰ものが心の奥底で思ったのだ。

どうしてこんな事になったのだろう。

ある者は疲れ果て、ある者は途方に暮れて、そしてある者は絶望の悲しみに浸っていた。

どうしてこんな事になったのだろう。

だがその中で一人だけ、その虚脱感の中から逸早く立ち上がった者がいた。本来彼女が果たすべき役割。それを意外な事に彼が言い出した。

「行くぞ。俺には奴にぶちこむ理由が山ほどあるからな」

誰にも異論を言わせない響きが、その言葉にあつた。そして誰も反対を口にする者はいなかった。

白い風に暗い歓喜はなかった。

暗い瞳には復讐の決意だけが漲っていた。

彼女に反対する理由はない。アレを倒す理由がまた一つ、増えた。今度こそ確実に殺さなければならない。アレに無残にも殺された幾多の魂の為に。

一行の足取りは重く、しかし確かな決意を持って歩き出した。それぞれの思惑は異なる。

だがアレは殺さなければならない。もはや損得ではなかった。これは神聖な復讐だった。

神聖な復讐？

彼女は自問した。そんなものがあるのだろうか？だが答えなどない。彼女にも出すつもりはなかった。

イリネアたちがメルロンを蹂躪するロスペロツソを見つけた頃、リュイシスはケルマデイクの図書館で悪戦苦闘していた。はつきりいつて現世においてあの悪魔の情報は乏しかった。名前を知られたのがつい最近だからだろうか。

だがロスペロツソと思しき巨大な赤龍の記録はかなり散見する事ができる。

何百年も前から、それこそ『天使王国』の盛期より百年から二百年の間隔で顔を見せる。

ただし断片的なものがほとんどで、巨大な赤い影が目撃されたとか、都市が一つ灰になったとか、そういった伝聞がほとんどだ。

ケルマデイクの図書館の歴史は『天使王国』そのものに比べれば大した事はない。

だが、豊かな寄付金に物を言わせてかなり珍しい蔵書があり、しかもそれが整理され保存されている稀有な存在だ。管理者である智識と魔術の神の神官たちの苦勞がしのばれた。

つまり、ここほど『天使王国』の過去にまつわる文献が揃っている場所は他にないともいえるのだが、それにしても得られた情報は限られたものだ。

はっきり言えばアレと遭遇して生き残ったイリネアやトルスの言葉の方が、これら伝聞をまとめた文献よりも価値があると思わざるをえない。

だが、それでも気になる資料はあった。といっても吟遊詩人の語る物語を口述筆記した本だったが。長々しく悲しい演目である為、そう滅多に演じられる事はない。

リュイシスにしても実際に歌われているところを聞いた事はなかった。だが内容は興味深い。

『エンペランス騎行』と名づけられたそれは複数の異説を持ち、その本も全てのヴァリアントを網羅している訳ではなかった。その物語に登場する敵役の火竜は一般に知られる赤き竜と比べても異様に巨大であった。

曰く、天を圧するほどの。曰く、一つ国を消し去るほどに。曰く、飛ぶほどに山野を滅する。

たかが物語である。安易な誇張はいくらでもされる。

だが吟遊詩人たちの物語作家にも一定の法則があるらしく、竜に対してそんな形容を用いる例は他にない。猛き炎の、とか、狡猾無比の、とか、硬き鱗の、とか。

恐ろしい能力や悪知恵が働く様子が述べられる事はあっても、大きさを強調する例はあまりない。

巨大な怪物なら他にも島鯨や大鳥など存在するから竜にこだわる事はないのかも知れない。

それにしても天を圧するという形容はリュイシスが知る限り他の物語では用いられた例はなかった。

複数のヴァリアントが存在し、めでたしめでたしで終わる場合もあれば、

悲劇的結末のものも、救われがたい最後で締めくくられるものもある。

物語であるのにエンペランスは火竜を倒す事ができず無念の戦死を遂げたというふざけた結末まであった。

「下級天使で天馬の騎士のエンペランスか。『城砦落し』に似ているな」

何処までも愚直に悪と戦い、そして落命する。確かにそれはボルメリアの生き様を見ると容易に想像できる最期だった。

それに思い当たってリュイシスは少し不機嫌になった。どうもリュイシスはボルメリアを好きになれない。

自分の身を省みない生き方が愚かで救い様がないのだ。

「まあ、いいけどな。『城砦落し』は好きに生きればいいだけさ」

問題なのはボルメリアではなくイリネアだった。

彼女たちと同行しているドウルワイトの定期連絡だと、どうやらロスペロツソが近いらしい。

力に任せて周囲を蹂躪する奴は、ドウルワイトが言うにはどうも不可解な悪魔だという。

半竜半悪魔であるロスペロツソは、おそらく悪魔として動いていると思われる。

竜の血が流れていても竜は余り強烈な目的意識を持って行動する事はない。

自分の縄張りや貴金属などの光り物の確保。それらが共通する最も強い欲望だ。

戯れに人を襲う事はあっても、自分の縄張りや勝手な真似をされるのではないかぎり、そうそう人と関わりあう事はしない。興味もないし、その間に他の同族に縄張りを侵されればことだからだ。

だが悪魔は違う。より多くの苦痛に彩られた魂を刈り取り蓄え、力となし、そして天界の軍勢と幾多の次元で繰り広げられている終わりなき戦いの日々で戦功をあげ、

一つでも多く悪魔の階位を上げて権力や魔力を手に入れる事が彼らの目的だ。

その意味で殺しまくっているロスペロツソの行為は十分悪魔的だが、翻ってみれば悪魔らしくない。彼らは残虐で他人の犠牲を樂しむ連中だが、破壊や殺戮が最終目的ではない。そうやって手に入れた魂を力に変えて、出世するのが目的なのだ。

大つぴらに殺しまくって、人々や天使に目をつけられて殺されてしまつては元も子もない。軍勢を率いて蹂躪する以外の悪魔は策略家であり、極端な話、策謀の最終段階でも黒幕は姿を見せないものだ。

ロスペロツソは単独で城塞都市二つをそれぞれ一日で陥落させた強力な悪魔だ。

それだけ強力な、つまり悪魔の階位が高い存在が、これ見よがしに暴れているというのが気に入らない。それがドウルワイトの意見だった。

悪魔が気まぐれで自分の姿をさらすという事はあるえない。

それは自分の手の内を見せる事であり、自分の能力をさらすという事は、自分を倒す対抗手段の手がかりを敵対者に教えるようなものだった。自身が黒幕なら絶対にしない。

ならばロスペロツソほどの悪魔に指図して暴れさせる事ができる者が背後にいるという事なのだろうか？

善と悪の対立など興味の外だったからリュイスに確信はないが、

しかしもしいるとしたら地獄の諸君主と言われる支配者たちぐらいではないだろうか、と思う。

地獄の支配者の一人が、この次元に何か大掛かりな企みを仕掛けているという事なのだろうか？

解らない。全ては推測でしかない。

結局、何の手がかりもないままイリネアをロスペロツソに突っ込ませる事になってしまう。

リュイスにとつては最悪のシナリオだ。

絶望を抱えて彼が本との格闘を終えた頃、外に出ていたクレドネエが戻ってきた。

彼の方は気楽なものだ。何せ近寄れば危ないと理解しているロスペロツソから遠ざかるのが目的で、リュイスのようにイリネアが彼らの情報を待ちきれずに突撃してしまう事を心配する事もない。

仲間が死ねば確かに悲しいだろうが、何時だって過去の思い出にしてしまえるのだろう。だから聞き込みの方とて身が入っている訳ではなかった。

「おー、お疲れさん。どうかね？」

外で買い込んできたらしい差し入れの食べ物をリュイスに渡しながら、クレドネエは難しそうな本を一つ覗く。そして瞬時に諦めた。

「どうかねもなにも、ロスペロツソに関する情報は極端に少ない。

地獄の諸君主の宮廷にでもいって聞き込みした方が早いくらいだ」

リュイスは椅子の上で伸びをする。他に手段が見つからないから、そんな冗談とも本気ともとれる言葉を口にしてしまう。クレドネエは冗談と理解しようだ。

「そいつはいいねえ。調べるのに時間がかかればかかるほど、命の心配をしなくてもいいわけだ」

地獄の諸君主の宮廷に向かう事が命の心配をしなくて済むことなのだろうか？リュイスは笑った。

「地獄はロスペロツソの本拠だぜ。奴がこの世界での破壊と殺戮の旅を終えて戻ってきていたら、どうするんだよ」

「なるほど、そいつは危ないな。じゃあ、やっぱりこの世で探さなきゃならないわけだ。

僅かな情報の痕跡を探してな……まあどっちでもいいけどな」

「お前は時間がかかればかかるほどいいんだろ？」

「そんな本当の事は言わない」

クレドネエはご機嫌だ。ロスペロツソを倒す手立てさえなければ、イリネアたちの元に戻らなくても済むのだからと思っている。

だが、それはリュイシスとは相反する考えだ。イリネアたちがロスペロツソを視界に納めたというならなおさらだ。

「お前には悪いが、イリネアたちと合流する事にする」

リュイシスの言葉はクレドネエにとって晴天の霹靂だ。思わずかじりかけの梨を落としそうになった。

「え？だってまだその竜を倒す方法を見つけていないんだろっ？」

「奴は火竜と悪魔の合いの子だ。冷気と善なる武器に弱いだろう事は想像がつく。冷気の呪文を手に入ればすむことだ。それをイリネアたちの武器に付与して、火炎を防御する呪文を唱えてやればいい」

「善なる武器はどうするんだよ」

「善なんて俺は専門外だ。ドウルワイトだって善神の僧侶じゃないしな。だが『城砦落し』は善なる軍神の使徒だ。しかも天使の眷族として悪を滅ぼす為に存在するといつても過言じゃない。

手持のカードはそろっている。戻るべきだろう。それとも、お前の方に何か新しい情報でも入っているのか？」

逆に問い詰められてクレドネエはしどろもどろになってしまった。

ここで時間稼ぎのネタでも用意しておけば、自分だけでもそれを探しに旅をすとか言つて離脱する事もできただろうが、どうせロスペロツソを倒す方法なんて見つからないとたかをくくつたせいでサボっている。言い逃れのネタはなかった。

「……こういう時、自分の真面目な性格が呪わしい」

口から出まかせを言つてリュイシスを煙に巻くことができればどんなにいいだろうと思つたのだ。

だが仲間相手にそれはしたくなかつたし、例え言つたとしてもリュイシスならば見破るだろう。観念するしかなかった。

「結局、こういう事になるのかよ」

「身支度を急げよ。明日には出発するからな」

言われて二度びっくりである。言い出したリュイシスは借りた本の整理を開始している。

本当に、一刻も早く呪文に必要な材料も揃えて今日にでも出発しかねない勢いだ。

「……別行動をとればよかった……」

クレドネエは今更ながらその事を悔いた。別々に動いていれば、自分だけ仲間と合流しなくても済んだのに。

リュイシスはそれを聞こえない事にした。彼の言葉を咎めて仲間から離脱させれば、それだけイリネアを守る人数が減るのだ。嫌々

だろうが渋々だろうが、クレドネエに仲間意識があるうちはイリネアの為にとことん利用するつもりだった。その意味で、リュイシスは魔術師らしく利己的であった。

「じゃあ、本の返却、手伝ってくれよ」

クレドネエの愚痴など耳に入らずに、キリキリ動くよう指示する。溜め息をついたクレドネエは仕方なく付き合うより他なかった。

ロスペロツソの動きは相変わらずだった。

人の五倍の速さで空を飛ぶ事のできる竜である筈なのに、破壊と殺戮を丁寧に繰り返している為に、イリネアたちの足でも捕捉し続ける事ができた。

竜の感覚は人のそれよりも遥かに鋭い。視覚に捕らえなくても、そのあたりに何かいるという事が解ってしまうという。だから迷宮や狭いところで竜に気づかれずに接近する事は至難の技だ。

だがロスペロツソほどの巨大な竜ならば、彼の感覚が届く外からでも視認する事ができる。

遮蔽物の一切ない空中で猛威を振るっているのだから尚更だ。だから距離をおいて追跡するのに問題はなかった。

それよりもイリネアやトゥルスが気を揉んだのは、

それだけ目立つ破壊活動をしているロスペロツソを倒しにくる同業者が現れる事だった。

何せ諸侯は莫大な賞金をロスペロツソにかけた。とりあえず相手を見つけて、攻撃するかどうか決めかねている連中はいる筈だ。

現にメルロンの後に彼が襲ったバスレイの山村では、ロスペロツソに攻撃を仕掛けた連中がいた。

それを目撃したトゥルスは彼一人でも駆け出そうとしたぐらいだったが、

襲撃者は自身の強さがロスペロツソにかなわないと見極める事ができなかった連中だったらしい。

最初の弓矢や冷気の呪文を放つ事が精一杯で、次の瞬間ロスペロツソが炎を吐き出したと思ったら静かになってしまった。逃げ出す事ができたのか、それとも炭になってしまったのか、イリネアたちには解らない。

ただ、ロスペロツソが悠然と山村で虐殺を楽しんだ事だけは確かだった。

それを見れば、勝てる戦いしかりと言いながらもボルメリアもトゥルスのように駆け出したくなる。

何の罪もない人々がロスペロツソという悪魔のような竜の玩具になって死んでいくのだ。それを阻止しないで何が騎士かと思う。

しかし今は我慢の時だった。呪文使いの攻撃力なしにロスペロツソに挑むなど自殺行為だ。

第一相手は空を飛んでいる。空を飛ぶ手段を持たないトゥルスやボルメリアでは、ただ殺されに行くようなものだ。

戦うからには勝たなくてはならない。

戦士としての本能が、善なる下僕としての使命感をギリギリのところまで押さえ込んでいた。

「良く我慢しているな。えらいよ」

そういつてボルメリアの肩を叩く者がいた。イリネアだ。端から見ればイリネアも怒りで蒼白になっている。

いや、ドウルワイト以外は皆そうだろう。彼ならば悪魔の来襲も天災の一種と見なす事ができるかも知れない。

だが他の三人には無理だ。ボルメリアのように義憤であれ、イリネアやトゥルスのように私怨であれ、戦って勝てるものならば、とうに仕掛けている。

だからボルメリアには、彼女に向けられたイリネアの言葉が実は自分自身に向けて言ったものだと理解できた。イリネアはそうやって自分自身を宥めているのだと。

バスレイの山村を一瞬にして全滅させたロスペロツソは、彼を監視しているポルメリアたちを嘲笑うように旋回し、悠々と寛いでいる。自分に挑戦しようとする冒険者を挑発しているようだ。

彼が視界からいなくなるのは困る。しかし見えていても困った。どうにも内から込み上げる苛立ちを押さえ切れぬ。雄叫びをあげて挑みかかりたくなる。

早く行ってくれ。こちらの準備が整うまでは、それ以上私たちの前に姿を見せないでくれ。

ポルメリアはそう願った。でないと苛立ちと憎しみのあまり飛び出してしまおうから。

だがそんな彼女の願いを踏みにじるかのようにロスペロツソは己の姿を誇示し続けた。

この山野はおろか、空の限りまで何者も恐れるものはないと言わんばかりに。そしてそれに鋭く反応したものがいた。

トウルスだ。

「・・・もう、我慢できねえ」

その呟きを耳にした時、委細構わず止めるべきだったのだ。だが気がついた時、トウルスはもう走り出していた。激しい怒りに我が身を委ね、驚いたことに空中に舞い上がった。

一体どういう事なのか、仲間が理解する前に、トウルスは一直線にロスペロツソへ向かった。放たれた白い矢のように。

「あれ、魔法の靴じゃないか。翼のブーツとかいうの」

今更気がついたらどウルワイトが呟いたが、もう遅い。イリネアもポルメリアも必死になって駆け出した。追いつく筈もないが、しかし無謀にも空を駆って突撃してきたトウルスにロスペロツソが反応した。

退屈していたのだろうか？人間の子供が自分に向かって真正面から飛び込んできたのを、いい玩具がやってきたと考えたのだろうか？

ロスペロツソは飛来し、両者は空中で激突する。間合いの長いロスペロツソの一撃が最初にトウルスを打ち砕く筈だったが、だがぎりぎりのところで彼は空中でとんぼ返りをうち、かわした。そしてそのままロスペロツソの懐深く飛び込む。

巨人の大剣が深々とロスペロツソの体に突き刺さった。それは巨大な鉄塊だから、という破壊力ではなかった。

魔法の力で強化された刃がロスペロツソの体をえぐったのだ。しかも突撃の勢いを上乗せしている。

予想以上の深手を相手に負わせた事は確かだった。

だが息をつく暇はない。ロスペロツソの爪は容赦なくトウルスを切り裂く。

トウルスには巨龍を切り裂く手段はあっても、それから身を守る術がない。一撃で吹き飛ばされ、墜落していくのが見える。幸い大地に激突する事はなく、翼のブーツは持ち主を静かに下ろす。

しかし誰の目にもトウルスには、もはや戦う力が残されていない事は解った。

一方のロスペロツソにはまだ余力がある。急降下でトウルスに止めを刺すべく襲い掛かってくる。

が、あわやというところで銀色の刃がそれを弾いた。間一髪でポルメリアが間に入ったのだ。

悪を滅ぼす力を持つ彼女の剣は、大ききこそトウルスのものに劣るものの、切れ味では引けを取らない。

そしてミスリル製のフルプレートに身を固めた彼女ならば、鉄壁の防御を誇る筈だ。

トウルスの傷をドウルワイトが癒す時間を稼ぐ事など問題ないだろう。

それについてポルメリアも不安を感じてはいなかった。だが問題はそれではなかったのだ。

彼女は恐怖を感じない。そういう感情を排除された、天使の眷属だ。

だが巨大な『悪』を直視した時、そのオーラの力をまともに感じ取ってしまう。立ちくらみのような眩暈が彼女を襲う。そう。ランカスタードの城で出会ったあの『ワーム』と呼ばれた少年を見た時と同じような感覚だ。

あの時に比べれば庄迫感はない。体は自由に動かしロスペロツソの攻撃を受け流し、しのぐ事もできる。だがいつものように迷いなく戦う彼女の姿ではなかった。

ポルメリアが稼いだ僅かな時間を利用してドウルワイトが傷を回復させる呪文を唱える。

しかしすぐさまトウルスが戦線に復帰できる訳ではない。

次第にポルメリアの動きが鈍くなる。心は逸るのに体がついていかない。

頭の上に重荷を載せられたようで、これが自分の体なのかと疑うほどに動かない。ロスペロツソの攻撃は次第に激しくなる。

ポルメリアはそれに応じきれなくなる。浮遊盾と両手持ちの大剣を使い守りを固めた彼女だったが、次第に追いつかなくなる。

ついに彼女の防御をすり抜けてロスペロツソの爪が彼女の体に届いた。たった一撃でも巨大な竜の攻撃だ。

小柄な彼女は簡単に弾き飛ばされた。ロスペロツソは、真正正銘自分と敵対する陣営である『天使の眷属』である事を悟ったのか、ポルメリアを押し潰して止めを刺すべく体当たりを仕掛けた。普段の彼女ならば避ける事のできる大味な攻撃だった。

だが、眩暈と共に動きは鈍い。治療能力さえ衰えたようだ。

ロスペロツソの巨体をまともに受け止めれば、ただの挽肉と化すだろう。

ポルメリアの脳裏には、この瞬間に自分が相手に与える事のできる最大限の攻撃を考える事しかなかった。

相手は向こうからくるのだ。例え命と引き換えでも、相討ちにならなくても、

少しでも仲間を逃がすためにロスペロツソに最大限の傷を負わさなければならぬ。

それが自分でできる最後の仕事と、彼女は覚悟していた。

が、鋭い閃光が一闪、ロスペロツソの顔面にきらめいた。その為に彼の狙いは外れた。

九死に一生を得たポルメリアが見たものは、ロスペロツソの左目に刺さった。一箭の弓矢だった。

それはイリネアの、万感の憎しみを込めた矢だった。

矢は続けて放たれる。全てが竜の鱗を貫通するものだ。だが最初の眼球に当たったものほどの事はないらしい。

さしたる傷を負わせた事にはならないが、視界を半分奪われた事はロスペロツソにとっても煩わしい事ようだ。

怒り狂い巨大な尾を振り回す。倒れていたポルメリアを始め、その場にいた四人に多かれ少なかれ打撃を与え、

ロスペロツソは飛び立った。逃げた、というよりも行ってくれた、という方が正しかった。

皆、手酷い傷を負った。中でもポルメリアは治療能力が思うように働かないという、かつてない事態に陥って、そのまま気を失った。

あれが一つの国を滅ぼした龍の力なのだろうか？

仲間が無事なのかどうなのか、確認する事もできぬまま、彼女の意識は遠のいた。自分の無力さを苦く噛み締めながら。

ざまーないな。

闇の中で彼女を嘲笑う声が響いた。目をこらすと闇の中に闇色の鎧を身にまとった男が佇んでいる。

胸甲にはかつてポルメリアの剣が貫いた穴が開き、赤黒い闇のくぼみとなっている。

その姿に見覚えがあった。ランキン騎士団に属していた頃の師匠であるランカスタードだ。

だがまとった鎧は彼女に倒された時の、つまりは悪に染まった時のもの。

あれ以来、ランカスタードはポルメリアの見る夢や幻の中で彼女を責め続けるばかりだ。

悪を滅ぼす事しか能のないお前が、巨大な『悪』と出会って立ちすくんだのか。滑稽だよな。

それについてポルメリアは何も言い返す事はできない。

私の力はそんなに弱いものだったのだろうか？与えられた力は、とるに足らぬ悪を倒すしかできないのか。

物言わぬポルメリアをランカスタードはそれ以上責めなかった。いつしか彼の姿は闇の中に滲み、何の痕跡も認められなくなる。変わって何か白い小柄な二つの影が浮かび上がった。その姿を見るだけで彼女の心の古傷が痛む。助ける事のかなわなかった、塔に閉じ込められた姉妹の姿だ。

あんたの力なんてその程度なのよ。悪を撃つ騎士といいながら、あんたは誰一人助けられない。何もできない。せいぜい屍の山を野に晒す事しかできないのよ。それって悪逆非道な騎士とどう違うの？何か違いがあるの？

白い幻の糾弾にポルメリアは耐えられなくなる。背を向けて走り出す。闇の中に何かがあるのか解らない。ただただあの姉妹から逃れる事ばかり考えて逃げ出した。

何時の間にか彼女は幼い子供になっていた。その頃は金色の髪を男の子のように短く切りそろえていた。剣の稽古の邪魔になるからだ。

子供の頃に戻り逃げたところで救いがあるわけではなかった。

彼女は母親を知らない。彼女と双子の姉を出産したあと、母は体を弱らせて死んでしまった。父にも会った事はない。ランキン侯爵たる父は国の象徴であり、神に捧げられる事を生まれる前から決められた娘に会う事すらなかった。姉とは生き別れたままだ。そして彼女は自分の人生とはそういうものだとして理解していた。

吹きすさぶ孤独が友であると言い聞かせた。それが『悪』を滅ぼす戦士として選ばれた運命なのだ。

だが、それでは、その『悪』と戦う事ができなかったら私はどうなのだろうか？何の価値もない。ただの人殺しであるという事なのだろうか。

彼女が逃げているのはその不安だった。自らの存在意義を突き崩す事実だった。

ロスペロツソとの戦いで、肝心な名の場面で思い通りに体が動けなかったこと。

『悪』を滅ぼす戦士が『悪』との戦いに役立たないのであるなら、何の意味があるのだろうか。それを背中の方こう側で白い幻が問い続ける。ランカスタードの影が嘲笑している。

逃げたところで、いやそもそも逃げ場所はあるのか？彼女には何も無い。何もなかった。

家族と過ごした幸せな時間も、無条件で愛された幸せな時代もない。孤児院の子供たちでさえ遠い。

私はどうすればいいのだろうか？私は。私は？

その時、不意に背中で感じ続けた幻の気配が消えた。闇の方こうから何かが聞こえてくる。何処かで聞いた事があるメロディ。そうだ。孤児院で時々祭司たちが子供たちをあやす時に歌う歌。子守唄だ。それが彼方から聞こえてくる。

ポルメリアは思わずその方向へと足を向けた。そこに何かあるのか解らない。だがもはや、それにすぎるしか彼女にはないように思われた。

不意に瞳を開いた。やはり暗がりの中だったが柔らかい焚き火の炎が見える。

その向こうに不機嫌なトゥルスの白い顔が浮かび上がった。良かった。彼は生きているのだ。

「あら、気がついたのね」

歌がやみ、柔らかい声が頭の上から聞こえる。どうやら彼女は声の主に膝枕してもらっているらしい。顔を上げると左目に眼帯をしたイリネアが優しく微笑んでいた。

その顔は、ポルメリアが今まで目にしたどんな人の顔よりも美しかった。

「イリネア、無事だったのですか？」

まだ夢の中にいるような心持ちでポルメリアは尋ねる。

「無事も何も、一番の重傷はあんだだったわね。傷も治らないし、目も覚まさない。

でもドウルワイトの治癒呪文は効いたようだし、こうやって目も覚ました。良かったわね・・・ほんと良かった」

イリネアはひどくのんびりした口調で呟くように囁いた。彼女の左手が眠りを誘うように柔らかく調子を取っている。睡魔に襲われたポルメリアは思わずこんな事を口にした。

「イリネア・・・母様みたい・・・」

母というものをポルメリアは知らないし、何故そんな事を呟いたのか彼女自身だつて解らないだろう。

だが今の彼女はまるっきりの子供だった。子供のように深い眠りに落ちていった。それは悪夢にうなされない眠りだった。

「こいつはいいや。イリネア、あんだ『城砦落し』の母親だったんだな」

焚き火の火が爆ぜる音しか聞こえぬ静かな夜だ。

ポルメリアの無邪気な呟きも、焚き火を挟んで向かい側のトゥルススの耳に届いたらしい。彼はイリネアを笑った。

「馬鹿言わないでよ。こんな大きな娘がいる歳じゃないわよ。一二つくらいしか違わないんだから」

怒つて見せるイリネアだが、さほど気にしてはいないらしい。

歳相応の無邪気な寝顔のポルメリアを見てると本当に愛らしい天使の化身のように思える。

もともとポルメリアは美しい娘だ。

だが普段の彼女はどこか威圧的な、全ての不正を見抜こうとするような厳しさに包まれていて折角の美貌も台無しになっている。こんな無防備な寝顔は珍しい。それがとても可愛らしいので、

イリネアはこんな少女が自分の娘として生まれるなら母親になるのも悪くないと思ってしまう。

「・・・娘は無理でも妹ぐらいにはなるのかな。生真面目で一本気で融通の効かない、面倒な妹だわね」

「違いな」

だがトゥルスの笑みを見ながらイリネアは悪戯っぽく微笑んだ。

「あんたは弟ね。手の掛かるやんちゃで自分勝手な弟」

「いつても」

トゥルスはやや拗ねたようにそっぽを向いた。だが昼間の一件は一方的に自分に非があると認めているらしい。

悪態はそこまでだった。イリネアにしろ、それ以上彼を責めようとはしなかった。

彼が飛び出さなかったら自分がやっていたかも知れない過ちだからだ。

ドウルワイトも非難めいた事は一言もいわずに一同の傷を治すと、疲れたといつて先に休んでしまった。

口汚く罵られる方が、こうなるとはつきりしていきが楽になる。だから責められない事が、却ってトウルスには辛かった。

「昼間の事だが・・・」

「過ぎた事だし、いいわ。皆こうして生きているし、それが一番大事な事かも知れないわね」

それでもトウルスの顔色は晴れない。イリネアは笑った。

「らしくないわね、『龍殺し』。見境なく竜を殺しにつつかかっっていくあんたが、変に後悔なんかして」

「らしくない・・・そうかも知れないな。今までの俺は誰がどうあれ、奴を殺す事ができれば本望だった。それなのに、何故だろう？『城砦落し』が倒されたと聞いた時、何だかとても嫌な気持ちになったんだ。

今だってお前たちは一言も俺を責めない。

「どうしてなんだ？」

イリネアは困った様な顔をした。どうしてと尋ねられて、ちゃんとした答えを用意できる訳でもなかった。

「そうね。あんたを責めたとして何か変わるという訳でもない。

誰かが死んだのなら話はまた変わるだろうけど、でも皆生きているわ。なら、それでいいんじゃない？」

「そうなのか？」

トウルスの顔は納得していなかった。仲間を危険にさらした行為は、何時だって責められてしかるべきだ。

幼い頃、家族と過ごした日々羊の群れを誤って他氏族の縄張りに誘導した時、彼は父親からこっぴどく叱られたものだ。縄張りを侵した罪により父が自分の羊達の中から良い雌ばかり八頭も相手に引き渡した事は、後から知った事だ。

北辺の遊牧民に限らず家畜は貴重な財産だ。雌は群れを増やす最も重要な家畜である。

それを提供しなければならなかったのは多大なる損失だ。当時トウルスの家は五十頭あまりの群れを率いていたから、八頭の雌となると頭数以上に重い罰である。決まり事を破った者は厳しく罰せられる。それがルトウロウの掟だった。

もちろん仲間内にそんな決め事はない。だがトウルスの突出で仲間が危機に陥った事は確かだ。

その事を責められずに済ませられるのは、確かに気持ちが悪い。

だがイリネアの考えは違うようだった。

「あんたたちが来る前、私たちの前衛は女エルフの戦士が張っていた。これがどうしようもない女でね。

一日一殺、何でも誰でもいいから殺さないと気が済まない女でね。強い事は強いけど、まあ厄介な奴だったわ。

『城砦落し』とは正反対。とてもじゃないけど街には長居できないし、

盗賊団とか、怪物とか、とにかく毎日殺している相手を見繕ってやらないとダメなのよ。

皆ウンザリしててね。ある時、竜と戦って彼女が死んだ時、皆ほっとしたわ。これでやっと馬鹿な気を使わなくて済むって。

ところが、私ときたら何だかとても悲しかったの。

彼女は無愛想だし、殺せれば満足だし、血を見なければイライラするという性格破綻者だったけど、死なれてみて私は理解したのよ。

あんな彼女でも、少なくとも私にとっては家族同然だったのだと。そして思ったわ。

家族を失うのは、二度とごめんだと」

家族という言葉聞いて、トウルスも納得したように顔を伏せた。二人の家族はどうにない。全てはあのロスペロツソが元凶なのだ。

イリネアにとっては、ロスペロツソを殺す事も重要なのだが、それよりも『家族』を失う事の方が堪えるのだろう。家族の仇を討つために、新たにできた『家族』を失うのは耐えられない。彼女はそう言っているようだ。

トウルスはしおらしくうつむきながら、焚き火から目をそらした。

「俺はあなたの家族じゃない」

「そうね。ただ単に同族ってだけね。でも私は家族だと思っているわ」

「そういうのは、重たいんだよ・・・」

だがトウルスの声に力はなかった。苛立っている様子もなかった。

少しばかり涙声が混じっているように聞こえるのは、気のせいだろうか。

「重いつて事は、大切だつて事なんだよ。大切な事は生きていくには大事な事なんだ」

「・・・勝手に言ってるよ」

そう言いながらトウルスは拒否したようでもなかった。イリネアは重ねて言う。

「ロスペロツソを倒して、失われた家族の魂に捧げたら、トウルス。私たちと旅を続けよう。今度は生きていく為の旅だよ」

トウルスはそれに答えなかった。本当に泣いているようだった。

『『ワーム』殿、もういいだろう?』

ロスペロツソは仮の場で傷を癒しながら水晶球に話し掛けた。その向こうには赤毛の可愛い少年が映っている。

「もういいだろうって、何が? いやー、ロスペロツソくんの活躍には脱帽だよ。

被災した者たちや君の難を避ける為にゾクゾクと人が集まってくる。

その対応でこちらの魔法陣作成は滞っているが、まあ数万単位で魂の捧げものがやってくるんだ。ちよつとの手間が構わないさ」

少年は満足げに喋っているが、ロスペロツソの方はそうはいかなかった。

「もう十分時間は稼いだといっているのだ。あの天使のなりそこないを殺してもいいだろう?」

「えっ、まだ殺していなかったの?」

脳天気な少年の答えにロスペロツソはうんざりした。

「じゃあ、殺していいのだな。奴も手ごわいが奴の同行者は手だれ揃いだ。私の鱗を切り裂き、私の目を奪った。鋭い切っ先だ。これ以上奴らの相手をしていると我が身に関わる。もう一度聞う。殺していいのだな?」

「・・・欲を言うと、もう少し暴れて欲しいよねえ。」

そうすると二十万ほどの魂が手元に転がりこむ計算になり・・・あー、解ったよ。冗談だよ。

まったく暴虐のロスペロツソともあるうものが追い詰められたものだね。そんなに手ごわい人間たちなのかい」

『窮鼠猫を囓む』という言葉をあんたは知っているか？」

ロスペロツソの問いに『ワーム』は答えた。

「知らないねえ。僕は囃まれた事はないし、第一『鼠』を狩った事もない。そういう事は得手な者に任せるさ」

「そうだな。あんたは策略を巡らし、そして敵対するものを狩る事はない。ただ殺すだけだ」

「そう。戦うのは好きじゃない。殺すのはいいけどね」

『ワーム』は無邪気に笑った。ロスペロツソは不機嫌に鼻を鳴らすのが、しかし殺戮の中に我が身を沈めるロスペロツソと『ワーム』は違う。

どちらも圧倒的な戦闘力を持っているし、おそらくロスペロツソは『ワーム』とまともに戦っても勝てないだろう。それでも『ワーム』は戦いそのものよりも策略を好む。

自らの手を煩わすよりも他の者に任せた方が、より多くの事ができるからだ。

ロスペロツソは人々を殺し恐怖のどん底に陥れる事はできるだろう。だがそれだけだ。

『ワーム』のように数十万人の魂を地獄に送り込む仕掛けなど、彼にはつくれない。

ロスペロツソは自分の性格と役柄を理解していた。そうでなければ地獄の階級社会で生き残る事はできない。自らの野心を達成するには、自分の力量を見極めなければならないのだ。

恐らく自分と『ワーム』の関係はこの先変わるまい。その方が自分にとつてもいい筈だ。

破壊と殺戮、めくるめく戦闘の日々がロスペロツソの喜びなのだから。

「まあいい。とにかく殺すぞ。その間、あんたはその賢い策略を進めるがいいさ」

水晶球から『ワーム』の姿が消えた。治癒呪文を唱えたロスペロツソの傷は急速に癒えていく。

だが潰された左目は元に戻らない。それをするには専門の術者に頼まなければならない。

それまでは左側に死角ができる。そして術者に報酬を用意しなければならない。

まったくもって腹立たしい事だった。

『ワーム』が気にする天使のなりそこないは、自分とロスペロツソとの実力の違いに押しつぶされて動きが鈍かった。

だからそれほどの脅威ではない。問題なのは、脆弱な人間であるにせよ、ロスペロツソの鱗深く傷付けた剣士の巨大な剣だ。そして憎むべきは癒えぬ傷を刻み込んだ女弓手だ。

「とつとと殺してやる。そうでなければ腹の虫が治まらぬわ」

暴虐なる龍は方針を決めた。遊びはこれまでだ。たかが四人。すぐにでも殺してやる。

暴虐の咆哮が響き渡った。

リュイシスと気の進まぬクレドネエが合流したのは翌日の事だった。

前日の事の成り行きをドウルワイトから聞いてリュイシスは激怒したが、睨むトウルスとの間に割って入ったのはイリネアだった。だからリュイシスは渋々矛を収めるしかない。

だが相手に手を出したなら、もはや必然として戦うしかない。誇り高い竜の血を持つロスペロツソが自らを傷付けた人間をそのまましておく筈がなかった。必ず向こうから襲い掛かってくるだろう。

「その前に、『龍殺し』。お前の手の内を見せろ」

リュイシスはトウルスへの敵意も露に言い捨てた。こいつがいなければまだ時間を引き延ばせたかもしれない。イリネアを説得して引き返す事ができたかも知れない。そう考えるとはらわたが煮えくり返るようだった。

意外にもトウルスは素直にリュイシスの求めに応じた。彼の性格なら拒否する事もありえたのに。

彼の持っているのは巨人が使いこなすよう造られた、巨人用の両手持ち剣だ。

それだけでも人を挽肉にするだけの破壊力があるが、それとは別にトウルスはその剣に魔法の力を込めていたようだ。竜殺しの力と悪を討つ力、それに冷気の力も込めている。

それを確認したリュイシスは不機嫌ながらも感心したように鼻を鳴らした。

「完璧な、対ロスペロツソ専用の武器になっているじゃねーか。有り金全部これにつき込んでいるな？」

トウルスは何も言わずに返された剣を背中に背負い直す。何も言わない。その態度に再びリュイシスは鼻を鳴らした。

「流石に、奴を目撃して唯一生き残った人間って訳だ。相手が何者だか、とつくにご承知とはね。調べまわっている俺達が、さぞ滑稽に見えただろうな」

それでもトウルスは何も言わなかった。リュイシスが彼に対して怒り心頭なのは解っている。

それに対して弁解する事は何もない。言い返すつもりもなかった。うがった見方をすれば、口論する時間さえ惜しく、ただちにロスペロツソを探し出して今度こそ殺してしまいたい一心なのかも知れない。

リュイシスはここで最期の説得を試みるつもりだった。

傷を負わされたロスペロツソの逆襲を迎え撃つのに都合のいい場所まで退却する事を考えたのだ。そのまま逃げられるなら尚いい。その点トウルスが暴走して他の者を危機に陥れたのは好都合だった。

「イリネア、ああいうこらえ性のない奴と仕掛けるのは危険だ。

ロスペロツソ憎さで暴走したあげく、『城岩落し』は倒れるわ、ドウルワイトとお前にだって傷を負わせたんだろ？ 悪い事は言わない。今回は見送って出直そう」

しかしリュイシスに向けられたイリネアの右目は冷やかだった。

「彼がやらなかったら私がやっていたかも知れないわ。

それに、何の冗談なの？ 私たちは四人でも奴に深手を負わせて撃退できた。六人揃えば今度こそ止めが刺せるつてもものじゃない。それに、弱った奴を他の連中が殺すかも知れない。私にはそんなの我慢できない。

奴は私の、いや私たちの手で殺さなきゃならないのよ」

あなたはそれが解っていない。

イリネアの碧眼がそう言っている。リュイシスは観念する事にした。

彼以上に絶望の溜め息を吐き出したのはクレドネエだったが。

「・・・奴の具体的な弱点は解らなかつたが、アレは火竜と悪魔の混血だ。だから両方の弱点を持っていると思ってい。そこを攻めるより仕方ないだろう。正直、奴の持っている呪文障壁を俺の魔法が突破できるかどうか自信がない。頼りになるのは『龍殺し』と『城砦落し』、そしてイリネア、お前の矢だ」

「そうは言っても奴の鱗は硬いわ。私の矢は奴の目を射抜いた以外は大した痛手になっていないはずよ。不意打ちでトウルスが与えた一撃が一番大きかったと思う」

さすがにイリネアは仇を前にしても冷静に観察している。

ボルメリアと自分が有効な打撃を与える事ができなかった事をしつかり見ていた。しかし渋々ながらもリュイシスは手立てを考えていた。

「俺とドウルワイトの呪文の大半をお前たちへの援護に使う。それでかなり当てやすくなる筈だ。クレドネエにも奴の懐に入ってもらおう。お前の急所狙いの攻撃が決まれば、心強」

「え？俺も計算に入っているのかよー」

できれば知らないふりをして戦いから遠ざかっていたかと思っていたクレドネエに、リュイシスの言葉は寝耳に水だ。だがやるとなればリュイシスは全ての手立てを講じて最大限の攻撃力でロスペロツソを落とすつもりでいた。戦力の出し惜しみをして戦いが長引けば、体力のある巨大な竜の体を持つロスペロツソが有利だ。

持てる力の全てを瞬時に出しきって先手をとって奴を倒さなければならぬ。そうでなければイリネアが死ぬ。

リュイシスにとっては、それだけは避けなければならない事だった。

「竜に感知されずに接近する事は不可能だと、俺たちは承知している。

くたばっているところを悪いが、『城砦落し』。お前には真っ先に突っ込んでもらわなくちゃならない。

最初の攻撃だけはなんとしても耐え抜け。それが勝利への最低条件だ」

まだ体が本調子でないボルメリアはマントに包まって横になっていたが、リュイシスの声に顔を上げ素直にうなづいた。矢面に立ち仲間を守る事。それが彼女の役割だ。辛いも何も無い。

流石にイリネアはボルメリアの調子を理解している為、顔を曇らせたが、しかしボルメリア自身が最前列に立つ事を望んでいる事も解っている。

本当に、強情張りで生真面目な妹だ。

イリネアは溜め息を漏らした。

『『城砦落し』が奴の攻撃を引き付け、『龍殺し』とクレドネエが奴の懐に飛び込む。

イリネアは狙撃。俺とドウルワイトは呪文の援護。武器に対する呪文の付与は事前に行っておく。とりあえず俺が思いついた段取りは以上だ。異論があるなら、言ってくれ」

リュイシスの言葉に誰も何も言わなかった。

イリネア、トウルス、ボルメリアの三人は自分たちの役割を考えればリュイシスの作戦は妥当だと思う。ドウルワイトにしても他にやる事などない。異論がある筈がない。

ただ一人クレドネエだけは何か言いたそうだったが、この期に及んで反対するというのもおかしいものだ。リュイシスは覚悟を決めてしまったようだし、

確実に勝てるまで待つべきと以前は主張していたボルメリアも宗旨替えしてしまったのか何も言わない。

それはロスペロツソが各地で繰り広げた殺戮の数々を目撃したからなのだが、同じ物をクレドネエが見たとしてもたぶん彼は自分が戦わない方を選ぶだろう。彼は戦士ではないのだから。

しかし戦士でなくてもイリネアの仲間である。皆が行くと決めたのなら、この場では付き合う他ない。結局彼も何も言わなかった。

「異論なんてないわ。奴が倒せるなら本望なもの。その線でもやりましょ。問題は奴のねぐらよね」

イリネアの言葉にドウルワイトが手をあげる。

「こう言う時こそ、困った時の神頼みだよ。手がかりはほとんどないしね」

「・・・また？」

脳気なドウルワイトの提案にイリネアは顔をしかめた。

だが確かに、自らの存在を誇示するように暴れ回った時と違い、

手傷を負ったロスペロツソは何の手がかりも残さずに飛び去っていった。解るのは飛んでいった方角ぐらいなものだ。地図を広げて、その方向にある竜のねぐらがありそうなところを片っ端から神に伺いを立ててみるしかない。

「・・・気が進まないのよね、アレ」

「まあまあ、そういわないで。これも運で奴だよ」

「そうかな？」

ところが、ドウルワイトと不毛な言い合いを始めたイリネアの顔が急に強張っていくのが解る。クレドネエの顔色が変わる。

トウルスがその巨大な剣を抜き、ポルメリアがマントを跳ね除けて立ち上がる。

その咆哮を聞いてようやくドウルワイトとリュイシスは異変に気づいた。

突然、凶暴な赤い嵐が舞い降りた。そうとしか形容できない。狙われたのはトウルスだった。

しかし間に入ったポルメリアが最初の攻撃を受けた。いつも着ている重装の鎧はない。

咄嗟に起動した浮遊盾と剣だけで、その攻撃を受けきる事はできなかった。

ポルメリアは簡単に跳ね飛ばされたが、それでもトウルスは逃れる事ができた。

呆気に取られるドウルワイト、リュイシス、クレドネエを尻目に、トウルスは武者震いした。

探し出そうと考えあぐねていた奴、ロスペロツソが向こうから出向いてきたのだ。

「こいつ。今度こそ殺してやる！」

竜が放つ畏怖や恐怖を噛み殺しながらトウルスは叫んだ。

一端飛び去ったロスペロツソはその巨体ゆえ空中で大きく旋回しなければ方向転換できない。

トウルスの翼のブーツで空中戦を挑む事もできるが、援護なしで一人で殴りあう事が無理なのは、昨日の戦いで解っている。滑空して突撃してくる奴を迎え撃つ。

自分の身も危険に晒さなければならぬだろう。鎧を身に付けていれば、

そう簡単に倒れる事はないポルメリアは先ほどの一撃で死ななかったもののすぐに立ち上がる事はできないようだ。

トウルスには盾などない。彼は憎しみによって高められた自分の集中力に賭けた。うまく行けば相打ちにはなる。

一瞬、自分の事を家族のようなものといったイリネアの言葉が脳裏を過ぎった。僅かな躊躇。

だがそれはほんの一瞬だった。例えイリネアが悲しむ事になろうとも、今この瞬間の為にトウルスは生きてきたのだ。ロスペロツソを殺す為に全てを賭ける。擦れ違い様の一瞬に全てを賭けた。

再び赤い嵐がやってくる。一直線にトウルス目掛けて降りてくる。

昨日の戦いでロスペロツソにもっと深手を負わせたのはトウルスの剣だ。

彼を殺せば、後の人間など鬨り殺しとロスペロツソが考えたのも無理はない。間に入るものは何も無い。一騎打ちだ。

だがトウルスは考え違いをしていた。巨大な体をもつロスペロツソの方が間合いが長いのだ。

ロスペロツソの牙の方が先にトウルスを捕らえるだろう。ろくな鎧を着ていないトウルスなど簡単に引き裂かれてしまう。その事に気づいたのは彼ではなかった。

横たわり傷ついたポルメリアでは間に合わない。ドウルワイトとリュイシスは呪文の詠唱に入っている。クレドネエは・・・自己犠牲の精神を彼に期待する方が無理だった。

トウルスにも今度自分を守るようにやってきたのが誰だったのか解っていた。

重々しい金の鎖のようなポルメリアの三つ編みではなく、軽やかな赤毛が舞った。

擦れ違い様の血飛沫は二つ。ロスペロツソはトウルスの大剣によって、今度は左の翼を切断されていた。

怒りの咆哮を竜は吠えた。それに慄きながらリュイシスは冷気の攻撃呪文を放つ。

トウルス以外からは注意がされていたロスペロツソは、

その氷の礫が嵐となって襲い掛かる呪文に対して魔法障壁を展開する事ができなかった。

ドウルワイトによる呪文増幅でリュイシスの攻撃は予想以上の打撃を与えたようだ。

翼を失い、冷気による傷を負ったロスペロツソはすぐに逃走に転じた。飛行手段を失っては屋外で戦う利点はない。

自分の住処で傷を癒しながら待ち伏せした方が良いと判断したのだ。

だが誰もロスペロツソの後を追おうとする者はいなかった。トウルスでさえ思わず叫んでいた。

「イリネア！」

二つ目の血飛沫は彼女の者だった。たった一撃で腹部を両断された彼女は青ざめた顔でトウルスを見詰めた。

「トウルス、無事？」

トウルスはうなづくしかない。

「そう・・・良かったわね。良かった・・・」

どうして最後の瞬間、イリネアが微笑む事ができたのかトウルスには理解できなかった。

リュイシスは血の気が失せた顔のまま絶句していた。手の施しようのない彼女の姿を見てドウルワイトも肩を落とした。クレドネエは所在無さげに佇んでいる。

受けた傷をようやく癒して立ち上がったポルメリアが見たものは、微笑んだ死に顔の彼女を囲んだ絶望の男たちだった。

何か言うべきだった。何か言わなければならなかった。でも、何が言えるのだろうか。

ポルメリアは起きてしまった事の現実感のなさから何も喋る事ができなかった。

それは皆同じだ。仲間の要であるイリネアが死ぬなど誰も考えていなかった。

彼女が死んでしまった今、何をどうすればいいのか？

誰も何もできず、ただ途方に暮れるしかない。涙を流し悲しみに震える事すらできない。巨大な喪失感だけがそこにあった。どれぐらいの時間がたったのだろうか。ポツリとトウルスが言った。

「・・・埋めてやらなきゃな」

「埋める・・・イリネアを埋めるだっ？」

反応したのはリュイシスだった。怒りに震えたその顔には、お前さえいなければと書いてある。だがトウルスはそれを無視した。

「いつまでもこうしているわけにはいかないだろう。俺は行くぞ。行って奴の脳天にこの鉄塊をぶち込んでやるんだ。俺には、そうする理由が山ほどあるんだ」

トウルスの言葉に意見する者はいなかった。まず無言でポルメリアが動いた。イリネアの遺骸の傍らで穴を掘り始める。ついでクレドネエが干切れとんだ彼女の下半身を運んだ。ドウルホワイトが穴に安置した彼女の遺骸に花を添えた。

リュイシスだけが身動きもしなかった。

弔いは甚だ簡単に終わった。

「ドウルホワイト、祈祷してやれよ」

クレドネエがつぶやく。だがドウルホワイトは首を振った。

「僕は自分の神を他人に勧めるのは嫌いなんだ。彼女の神を僕は知らないし。これはこれでいいんじゃないのかな」

するとトウルスが不思議な声音で歌い始めた。

それは決して聞き覚えのあるものではなく、稚拙で、いやはつきり言えば下手な歌だった。だがそれでもいいとポルメリアには思えた。イリネアは同族の歌によって送られるべきだ。そう思えた。

埋葬を終えたトウルスが歩き出す。ロスベロツソの流した血は多い。跡を追うのは簡単だ。ポルメリアは無言でそれに続いた。弔いの最中、終始無言だったリュイシスは思いつめた凄惨な顔つきで彼らの後を追う。ドウルホワイトはクレドネエを見上げた。

「君が嫌がっていたのは知っている。だから、ここから引き返してもいい」

「・・・そいつはありがたいが、お前ら、本気かよ。イリネアはもういないんだぜ？」

「だからだよ。もうこれは僕たち『家族』の問題になったのさ。

僕の種族は本当に家族思いなんだぜ？家族の仇を討つのは、息をしているくらい当然の事なんだ」

君はどうなのさ。

ドウルホワイトの視線がそう尋ねている。クレドネエは迷った。

実際付き合えと命じられたり、帰れと言われたりする方が楽だ。責任は言った相手にあるのだから。こうやって判断を預けられると困る。命あつての物ダネだが、仲間を見捨てたと言われるのも嫌だ。

どうやら迷っているのが顔に出てしまったらしく、ドウルワイトは歩き始めていた。

「迷うならやめた方がいい。実際馬鹿な話だ。得にはならない」

「ならなんで行くんだよ？」

振り返ったドウルワイトは透明な、そしてクレドネエを哀れむような笑みを浮かべた。

「だから、『家族』の問題なんだよ。解らないなら、帰った方がいいんだよ」

そう言い捨てる、先を歩く仲間に遅れまいと小柄な足を早めていった。

だが、そうですかとクレドネエも引き返す訳にはいかなかった。彼にだって仲間意識はある。疎外されるのは嬉しくない。慌てて駆け出した。

「ちょっと待てよ。行かないとは言っていないだろ。付き合おうよ。イリネアの敵討ちなんだからな」

ポルメリアが意外に思ったのはリュイシスの態度だった。彼は真白い顔で、トウルスを罵りもせず黙ってついてくる。トウルスに向けられるはずの怒りがロスベロツソに転換されたのだろうが、そうさせたのはトウルスの言葉だった。

ポルメリア自身も彼の言葉に背中を押されるように歩いている。

ドウルワイトが『家族』の問題だと言った。そうなのかもしれない。

『家族』などいなかったポルメリアにとっては良く解らない感情が沸き起こってくる。

イリネアは死んでしまった。でも彼女が私達を支配している。

ポルメリアはその事を甘く、苦く受け止めた。